「一晩ゆっくり寝られるって、こんなに幸せなのかと思いました」

別居はしたものの、「子ども達の姓が変わるのもかわいそう」と言う気持ちもあり、籍はそのままにしてあった。長女次女はそれぞれ嫁ぎ、美千代さんは教会音楽の学びにアメリカのテネシー・テンプル大学へ留学、その後、関西の神学校でも学んでいた。

別居した主人から電話が

美千代さんが関西の神学校在学中の一九九八年の晩秋に、別居して十七年くらいたっていた夫から電話があった。

「肺ガンで入院するから、看てほしい」というのだ。

政子さんが、「何を今さら」と返事をしたとしても、おかしくはない。それまで夫から、家へ来たいとは何度も言われたが、当日になって断ってしまうことが多かった政子さんだった。しかしその時は素直に、「それなら看てあげよう」という気持ちになった。これも神さまの働きなのだろう。

紹介された愛知病院へいっしょに行くと、医師は、「余命六ヶ月でしょう」と言う。

夫にはどうしてもイエス様を信じてもらわなくてはならない。教会の保育園の給食の仕事をすぐに辞め、できるだけそばにいるようにした。

美千代さんは、その頃お母さんから受け取った手紙をよく覚えている。

「お父さんから連絡があり、肺ガンの末期と分かりました。最期の時を家族と一緒に過ごしたいというので、色々なことがあったけど、間もなく人生を終えようとしているお父さんを受け入れようと思います。仕事を辞めて看病することにしました」

過去のことを思って、母のこの応答に美千代さんは驚いた。しかし、「あぁ、神さまは、祈りに答えて下さった。あと半年、父に救いのチャンスを下さった。『亡くなった』という知らせよりどれほどよいか」と思えた。すぐ、「私もずっと祈って来たから、応援する。皆にも祈ってもらうから」と返事をした。

二人の励ましになったのは、「**主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます**」（使徒の働き16章31節）という約束だった。

美千代さんは、アメリカに留学中、学生の集会で「福音を、まずあなたの身近な人に伝えなさい」というチャレンジを受けていた。その時頭に浮かんだのは父親だった。

聖歌578番「滅び行くたましいを重荷とはなさずや？なにゆえに主の救い人々に語らぬ」というフレーズが頭の中をぐるぐると回り、「今まで、父親を罪人だ罪人だと思っていたけれど、自分も神さまから見たら、同じ罪人だ。父にも福音を伝えなければ」と思った。それまで父親の救いのために祈ったことはなく、かえって恨んでいた。「今父を赦さなければ、永遠に重い気持ちを持ち続けてしまう、憎めば憎むほどむしろ自分がつらくなる」と分かり、自分なりにアメリカから父に手紙を書いて伝道し始めていた。返事は来なかったけれど。

「天国で待っとるでな」

週日は病院で、週末は自宅でという療養生活だった。蒲郡教会のシメオンソン宣教師はどちらにも何度も訪ねてくれた。

「自分は仏教だから」と、興味を示さない勝さんだったが、野球が好きなことを知った宣教師は、中日ドラゴンズの話をしては友達になるよう努めた。また、年輩者にも分かりやすい自作の教材を駆使して伝道した。

シメオンソン宣教師

なかなか「信じる」とは言わないが、心の中には変化が起こっていたらしい。教会のみんなにも、美千代さんの神学校でも祈ってもらった。

脳にガンが転移して一時重体となった。神学校から呼び戻された美千代さんは、看病についた夜、一晩中祈った。

「神さま、どうか父をこのまま死なせてしまわないでください。どうかこのまま永遠の滅びに入れてしまわないで、助けてください」

神さまは祈りに答えて下さり、病状は持ち直した。恵みの時だった。

勝さんが、シメオンソン宣教師の後について、救いを求める祈りに「アーメン」とようやく唱和できたのは、最期も近い頃だった。

だいぶ呼吸が苦しくなった時、『マー、あかんなぁ』と言うので、『天国へ行くんだからね、私たちも後から行くからね』と政子さんが言うと、『うん、待っとるでな』と勝さん。葬儀も教会でしてもらうよう、自らお願いした。

数日後、担当医師から促され、家族が集った。

「お父さん、皆が来てくれたで何か言いたいことがあったら言っといたら」と言うと、

「そうだなあ」と言って、一人一人に声をかけ、礼を言い、

「後のことは頼むで、皆仲よくやってくれな。アーメン」と大きな声で言って、

「お母さんがアーメンだもんで、俺もアーメンになっちゃった」と言うのには、思わず皆の表情がゆるんだ。

召された朝、夜勤明けの看護師が、帰宅前に病室に来て、静かに言った。

「もうこれでお会いできないと思いますが、田辺さんは他の患者さんとはどこか違って、すばらしかった。病状が悪化して行く中でも、いつも冷静で、私たちの労をねぎらって、逆に励ましてくれました」

長く苦しめられた夫を「すばらしい」とは思っていなかった政子さんは驚いた。その病院では同じ病いの方々が多く、病気が進むと自分でも分かるから、取り乱す人もいる。神さまは、家族の願う以上のことをして下さった。

一九九九年の八月四日、発病を知らされてからほぼ九ヶ月目に、六五才の勝さんは、妻と娘たちに見守られながら天国に旅立った。

墓石には、「わたしの目には、あなたは高価で尊い。わたしはあなたを愛している」（イザヤ43章）と刻まれている。

この事を通して、家族の心につかえていた重く暗いものが取り去られた。家族でも、赦し愛することは難しいことがあるが、神の命令に無条件で従う者には、報いが豊かにあることを知らされる。

「あなたがたは深い同情心、慈愛、謙遜、柔和、寛容を身に着けなさい。互いに忍び合い、だれかがほかの人に不満を抱くことがあっても、互いに赦し合いなさい」（コロサイ3章12～13節）

＊美千代さんは、豊橋恵みバプテスト教会伝道師。夫の依田（よりた）忠克さんは、中日本聖書神学校学生。十月には第一子出産の予定です。